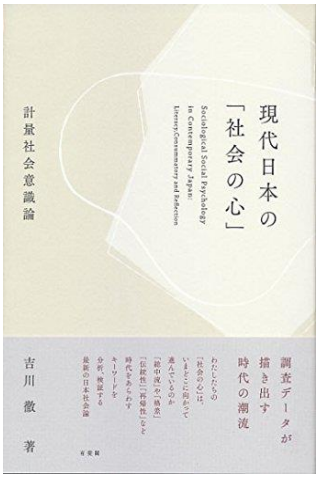
Aクラスの本を読む　その８



現代日本の「社会の心」

計量社会意識論

吉川 徹

有斐閣、2014 年

写真は amazon

本を読む機会は少なくないつもりだが、ほんとうに面白い本は年に 10 冊もあればいいところで、厳選して読んでも、その確率はおそらく数十冊に一冊といったところだろう。

そうした A クラスの本もこれまでは読んで終わりだったが、それでは勿体ないと考え、自分の心覚えも兼ねて、簡単にご紹介していこうと思います。

ここ 1 ヶ月ほどで読んだ新刊本の中では、芝山孝(2015)『ありがとよ築地－魚河岸と生きた四十年－』と小和田哲男(2015)『戦国史を歩んだ道』が面白かったが、A クラスということで学術書になりますが『現代日本の「社会の心」』を紹介することにします。

本書は、日本の「社会の心」、すなわち日本人の社会での立ち位置（地位アイディフィケーション）と社会とのかかわり方（社会的オリエンテーション）が 1985 年以後どのように変化したかを明らかにしたものです。

振り返れば、「社会の心」に関心が集まり、「日本人論」が盛んな時代がありました。1980 年代です。当時、「社会の心」は、保守―革新の政治対立、伝統―近代主義、総中流現象として理解されていました。そしてこうした理解が広範なコンセンサスを得ていました。その後、東西冷戦の終了、バブル経済の崩壊、グローバリズムの進展などによって政治・経済・社会環境が大きく変化し、かつての概念で現在日本人の「社会の心」を把握することはできなくなりました。それではこれらに代わる新たな概念として何があるのかと問えば、どうもはっきりとしない状況です。一方で、「社会の心」を大切にする風潮が強まり、いろいろな議論がなされていますが、その多くは印象論であり、量的なデータによって検証されたものではありません。

そこで、現在日本人の「社会の心」を巷間よくある印象論ではなく、量的なデータ検証によって明らかにしようとしたものが本書です。

本書で採用されている理論モデルは、社会意識論の分野では代表的なモデルで、社会的

態度を性別、年齢、学歴、職業的地位、経済力の 5 つで説明しようとするものです。使用データは 1985 年以後の SSP 調査等のデータ、分析方法は基本的に OLS 重回帰分析です。なお、本書は文部科学省科学研究費による「現在日本における階層意識と格差の関連変動過程の実証的解明」の研究成果です。

目次構成は、次のとおりです。

序　章　「社会の心」を計量する
第１部　社会意識論の再構築
　第１章　社会意識の捉え方
　第２章　計量社会意識論の作法
第２部　アイデンティフィケーションの軌跡
　第３章　一九八五年の日本
　第４章　総中流現象の正体
　第５章　総中流社会から総格差社会へ
第３部　オリエンテーションのゆくえ
　第６章　伝統-近代主義の静かな退役
　第７章　主義なき時代
　第８章　QOL 志向の密かな時代変化
終　章　覚醒性・直結性・再帰性

第 1 部は理論編、第 2 部と第 3 部は分析編です。ここでは終章の結論部分を敷衍しつつ紹介します。

著者は、本書の知見として、①地位アイデンティティの明晰化、②伝統―近代主義の無効化、③社会的オリエンテーションのコンサマトリー化の 3 点を挙げています（pp223）。以下、順に説明します。

1. 地位アイデンティティの明晰化

本書では、地位アイデンティティを「自分の帰属階層を上、中、下のいずれと意識しているか」といった階層帰属意識（5 段階評価）で計測しているのですが、これを見ると、1985 年の調査では、階層帰属意識に対しては主として経済力（世帯収入）が影響していたが、2010 年の調査では、経済力とともに学歴（教育年数）、職業も影響するようになりました。その結果、階層帰属意識に対する予測力もほぼ 2.5 倍上昇しました。つまり、ある人の属性を見れば、その人がどのような階層帰属意識を持っているかが 1985 年時点よりもかなり正確に予測できるようになったのです。これを一般化して言えば、地位アイデンティティは、多元的かつ明瞭に社会階層に繋ぎ留められる状況に至たり、人々の階層についてのリテラシーが向上したことになります。

著者は、かつての総中流社会という認識が自分の姿をよく見極めるリテラシーがない中での「幻影的平準化状況」であったとすれば、現在の格差社会という認識は自分の立ち位置を冷静に把握した上での「覚醒的格差状況」であるといいます。

2. 伝統―近代主義の無効化

伝統―近代主義について、権威主義的伝統主義（権威ある人には敬意を払うべき、従前のやり方が最上の結果を生む等）と性別役割分業意識（男は外で働き、女は家庭を守るべき等）を指標・被説明変数とし、これを性別、年齢、学歴、職業的地位、経済力の 5 つの変数でどの程度説明できるかを検討しました。その結果、説明力は 1985 年よりも 2010 年の方が低下しました。ケースによって異なりますが、2010 年の説明力は 1985 年の 2 割～5 割程度になり、また学歴の影響力が大きいことが明らかになりました。

ここで重要なことは、わが国の伝統―近代主義を主として規定していた要因は、米国に見られるような職業ではなく、学歴であったということです。1980 年代には社会の高学歴化がまだ進行中だったので、若年=高学歴＝ホワイトカラー=近代主義的、壮年=低学歴=非ホワイトカラー＝伝統主義的という明確な対応関係がありましたが、その後高学歴化が広く行き渡たり、頭打ちになったため、この対応関係が不明確になり、伝統―近代主義と社会階層の対応がよく分からない状況に至ったのでした。

伝統―近代主義は、20 世紀においては、社会意識研究の不動の屋台骨とされてきましたが、21 世紀の日本社会においては、もはやその役割を担うことができなくなっていると著者はいいます。

さらに、①と②から次のことが考察されます。

地位アイデンティティ、伝統―近代主義は広く見れば同じ社会意識の範疇に入り、性別、年齢、学歴、職業的地位、経済力は社会階層の範疇に入ります。すると同じ社会意識といっても地位アイデンティティは社会階層との関連を強め、伝統―近代主義は社会階層との関連を弱めたことになります。もし社会意識に係る変化の原因が格差の進行や階級の「死」で一元化に説明できるものなら、地位アイデンティティも伝統―近代主義も同じ変化傾向を示すはずです。しかし、現実は相反する傾向を示しており、このことは格差の進行や階級の「死」といった単純な説明は受け付けないことを意味します。

3. 社会的オリエンテーションのコンサマトリー化

それでは、かつての伝統―近代主義に代わるような新たな基軸は何なのでしょうか。いろいろ検討した結果、有望な候補と思われる不公平感や向社会性は、特定の社会層が強い傾向を持っているわけではなかったので、基底的社会意識（〇〇主義）としては有用ではありませんでした。また多様な考え方の並存を許容する心構えが広がってきることも判明しました。つまり、〇〇主義といった一元的な軸上に自分自身を位置づけること自体が成り立ちにくくなっているのです。

それでは現在は無秩序状態かというとそうではなく、人々の社会的活動の積極性(活動頻度)を見ると、階層による明確な傾向が見出せました。具体的には、文化的活動、社会参加活動、文化的消費活動のいずれについても、社会的階層が、それなりの予測力を持っていることが分かりました。概して、高学歴、高経済力、壮年、女性が活動頻度は高い傾向にあります。ここでは対立的構図がかつての若年大卒 vs.壮年非大卒のから、若年非大卒 vs.壮年大卒に変化しています。

以上から次のようにいえます。現在の日本人は、自分の社会的位置づけについて覚醒的に自覚しているが、主義や理念などの社会的な望ましさを介さず、一人ひとりの個人が即断的に社会的オリエンテーションを決定し、行動している。これを社会的オリエンテーションのコンサマトリー化（自己充足的⇔道具的）と著者はいいます。

さらに著者は再帰性という概念を使って検討を続け、現在の状況は、「覚醒性（リテラシー）＋直結性（コンサマトリー）＋再帰性（リフレクション）」であるといいますが、この部分は割愛し、社会のしくみと「社会の心」をつなぐ今後のカギは何かという最後の考察部分を簡単に紹介します。

著者は、年齢と職業的地位の影響力は明らかに低下しており、性別は現時点では確実なことはいえないとし、今後のカギは学歴であろうといいます。その理由として、一つには雇用が安定していた時代には学歴よりも職業的地位（会社名や職位）が重要であったが、雇用が流動化した時代では最終学歴こそが個人の社会的地位やライフチャンスを示すシンボリック・トークン（象徴的通標）となること、二つには、現代の高度な情報社会、グローバル社会の秩序の根幹にあるのはエキスパート・システム（専門家システム）ですが、学歴はこのエキスパート・システムと表裏一体の関係にあることを挙げています。

本書は、専門的な学術書なので、必ずしも万人向けではなく、また内容を正確に理解するには相当な背景知識が必要になります。本稿で書いた筆者の理解も不正確かも知れません。しかし、そのことと本の評価は別物で、今回再読してみても、A クラスの評価に変わりはありませんでした。

意見に係る部分は、筆者個人の見解です。

橋本　武（一般財団法人日本開発構想研究所・研究主幹）